

平成30年度

第1回泉大津市総合教育会議  
議事録

平成30年7月17日

泉大津市

平成30年7月17日(火)午後3時30分より平成30年度第1回泉大津市総合教育会議を泉大津市役所3階301会議室に招集した。

出席委員等

市長 南出 賢一  
教育長 富田 明德  
教育長職務代理者 藤原 洋子  
教育委員 西尾 剛  
教育委員 池島 明子  
教育委員 奥 健一郎

意見聴取者

大阪市立大学大学院工学研究科 横山 俊祐

出席事務局職員

総合政策部長 吉田 利通  
教育部長 丸山 理佳  
総合政策部理事 井澤 克介  
教育部理事兼教育政策統括監 櫻井 大樹  
教育部理事兼指導課長 西村 修  
教育部参事兼生涯学習課長 鍋谷 芳比古  
政策推進課長 東山 博文  
教育政策課長 木村 浩之  
スポーツ青少年課長 濱辺 晋一郎  
教育政策課 有澤久喜  
教育政策課 小川裕貴

協議事項

- (1) 泉大津市教育みらい構想について
- (2) その他

(1) 泉大津市教育みらい構想について

◎教育政策課長（木村浩之） 泉大津市教育みらい構想の策定にあたり、まず有識者会議での議論についてご説明いたします。

まず、課題については、ソフト面とハード面の両方について話題になりました。ソフト面の課題としては、いじめ、不登校の解消、学力の向上、地域に開かれた学校づくりなど、学校教育の不易の部分がございます。次に、新たな学びを実現する主体的、対話的で深い学びを実現する教育課程、一貫性のある教育の提供、公民館等社会教育関連施設利用者の高齢化、固定化など、現在の課題への対応が求められているということです。

ハード面の課題としては、本市の教育関連施設の多くは、人口増加の著しかった昭和40年代に建設された建物が多く、老朽化が進行しており、泉大津市公共施設適正配置基本計画を踏まえまして、公共施設の15%削減、教育関連施設の複合化などへの対応が求められています。さらに、差し迫った建替えの対象として上條小学校があり、その次の大規模改修対象としては、条東小学校と小津中学校があります。

これらの課題を解決するためのソフト面の取組みは、ハード面に縛られる部分があり、特に校舎を建替える際には、先を見据えた学校施設の検討をしなければなりません。

つまり、これまでと同じように学校をつくるだけではなく、みらいを見据えた先進的な教育を可能とする学校施設、市内全域の教育関連施設の全体の配置を検討し、総合的に教育のみらい構想の策定をめざしております。

泉大津市教育みらい構想有識者会議では、これら現状の課題解決をめざした方向性について、議論を深め、その結果、3つの方向性が見えてまいりました。1点目一貫教育の推進、2点目コミュニティ・スクールの推進、3点目社会教育機能との複合化です。

それでは、これらの方向性について、ご説明いたします。

1点目一貫教育の推進については、これまでからすでに取組んでおり、全国でも先進的な取組みとして、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムによる保幼小連携も行っています。

小中連携についても、小中連携協議会により、小学校で中学校の教科担任制やまとめテストを行うなど、中学校での学習の要素を取り入れて中一ギャップの解消を図っています。

また、高校についても、隣接中高連絡協議会を設置し、泉大津高校をはじめ、周辺高校との連携を図っています。

現在、これらの取組みにより、小中等連携は進みつつありますが、例えば、施設一体型の学校ができれば、就学前と小中学校の連続性のもと、0歳～15歳までの学びを保障する計画的、系統的な一貫教育が、より一層推進することが可能となるのではないかと思います。

次に、コミュニティ・スクールの推進については、泉大津市では平成12年に地域教育協議会（すこやかネット）を中学校区ごとに立ち上げ、地域と学校のパートナーシップに基づく「連携・協働」を行っています。

その下地をもとに、地教法改正により、努力義務化された学校運営協議会による学校運営すなわちコミュニティ・スクールが実現できれば、真の意味での地域に開かれた学校、地域とともにある学校づくりを推進できると思われま

3点目に、社会教育機能との複合化については、教育大綱に「市全体を網羅する豊かなつながりの中で、楽しく学びあう仕組みづくりが必要であることから、学校教育の充実と併せて、公民館や図書館などの生涯学習施設における学習機会の提供をはじめとする社会教育の充実にも力を入れる」とあります。

また、教育振興基本計画においても、基本理念として「つながりからはじまる学びの環」とあります。これらの考えをもとに学校施設を地域コミュニティの活動拠点としても活用することを考えて整備・開放し、小さいながらも社会教育機能を有することができれば、生涯学習体制の充実が一層図れるのではないかと思います。

以上のように、泉大津市が大切にすることについて、議論がされてきました。この議論により導き出された方向性と今まで泉大津市が培ってきた取組みを大切に、子どもだけでなく、大人も生涯において学び合い、生きがいを持てる教育のまちづくりをめざす必要があると考えています。

◆教育長（富田明徳）少し、補足をさせていただきます。

泉大津市教育みらい構想有識者会議で話し合われた概略の説明が、教育政策課長からありました。

ハード整備については、更新の時期を迎えており、財政的にも厳しく、本市としては、ピンチであるが、これを機会に、教育内容の改善、良い学校をつくる、何10年に1回のチャンスでもある。その際に、どのような学校をつくるか、どのような施設配置にするかを、真剣に考えないといけない時期に来ているので、有識者の先生方に意見をいただきながら、考えています。そのなかで、見えてきたのが、先ほどの3つの方向性です。

みらい構想では、人口動態の予測がある、20年先ぐらいを目途に、手前の10年を考えていこうとしています。その中では、今言ったような、20年後では、小学校の統廃合はないのではないかと、といった意見も出ています。

そういったことも踏まえながら、公共施設の15%削減や、一貫教育の方向性など、本市として大事にしたいことは何かということ話し合いながら、具体的な案を横山先生に作っていただいているというところです。

◎教育部長（丸山理佳）ハードとソフト、両面での課題があり、3つの方向性を示していただいておりますが、その中で、社会教育機能との複合化とありました。この視点からでも結構ですので、ご意見ありますでしょうか。

◆市長（南出賢一）ざっくりしているので、質問がしにくいのではないのでしょうか。

これは手段の話ですよ。この手段を使った教育を通じて、どういった人材を育てるか考えると、教育振興基本計画に載っているものになると思います。そのあたりの共通言語化が必要になるのではないかと、私は思います。

手段の話をして、めざすところと繋がっていなかったら、理解も深まらない気がするので、そこが問題点かと思えます。

◆教育委員（奥健一郎）3つの方向性は、学校の統廃合ありきの話ですか。その中で、こういったことを進めるべきだ、となったのですか。

それとも、話を進めていく中で、統廃合した方が良いとなったのか、どちらですか。

◎教育部長（丸山理佳）前回の教育みらい構想においても、泉大津市が理想とするものは何か、教育として大事にしていきたいものは何かを考えてきました。

ソフト面だけでなく、ハード面の課題もあるので、構想として、どうまとめていくかを、有識者の先生方にご意見を頂いております。

◆教育長（富田明徳）有識者会議では、課題解決のための手段を検討しており、総合教育会議では、理念などを話し、みらい構想の話は、この場で話す話題にふさ

わしいと思います。

◆教育委員（西尾剛）一貫教育、コミュニティ・スクール、社会教育機能との複合化、それぞれに良い面があるが、学校の形態・活動をどうするのか、財政の問題など、色んなものが複雑に、密接に絡まり合っているので、色んな切り口が考えられるため、材料がないと議論しにくいと思います。

◆教育委員（奥健一郎）何の事業においても、事業を始めようという時には、何のためにそれをするのかという意義・目的・大義名分がないと、うまくいかない。

例えば、一貫教育の場合、こういう教育がしたい、一貫してこういう人材を育てたい、そのためにこんなカリキュラムを組みます、なので一貫教育をしますという、意義・目的を明確にしないといけない。

予算が限られた中で、何とか出した苦肉の策であれば、中々うまくいかないことが多い。

◆教育長（富田明德）もう少し説明させていただくと、4月の第1回有識者会議には市長も入っていただき、プレゼンもしていただいております。

私もパワーポイントを使い、いじめや不登校、学力の問題を、具体的にグラフに示しながら、どういった課題があるか、そして、こういった不易の課題の解決を考えたときに、一貫教育はメリットがあるのではないかという細かい説明をさせていただきました。

市長の方からは、泉大津市の置かれている位置や、今、世界では何が求められているのか、どういう人物を育てていくことが大事なのかという話をいただきました。

有識者の先生方には、こういった話をベースに、考えていただいています。

教育委員会会議の後の意見交換会で、教育委員の皆様にお話しさせていただいていますが、私の大学院での研究についての話が、この話のベースとなっています。

この場では、もっとこういったことも大事にしたら良いのではないかということを書いていただき、そういったことも盛り込んで、横山先生に考えて頂きたいとかんがえています。

◆教育委員（西尾剛）横山先生から説明いただいてから、質問をしてもいいですか。

◆教育長（富田明德）それでは、横山先生から説明をいただきましょう。

◆（横山俊祐）先ほどの3つの方向性の内の1つである、一貫教育の推進を具体的に、泉大津市で展開するならば、どのような方法、可能性があるか、検討を始めているところです。

本日の説明は、この方法で推進するという確たる方向性を示すのではなく、たたき台として、色んな可能性を説明します。

本市で一貫校を考える上での前提は、市内の8小3中をすべて、小中一貫に転換、コミュニティ・スクールとの連動、人口は減少傾向にあるが、短中期的には統廃合を考えない。公共施設再編との連動を考えながら教育施設の複合化、共用化などを前提にする必要があります。長期的に考えると、児童・生徒数の減少による、統廃合も考えられるが、学校をうまく作っていけば、まちづくりに波及していき、逆に、人口が増加するという事例もあります。

短期的なスケジュールとしては、上條の建替え問題が目の前にあるので、小津校区の小中一貫校区化が、第1期になるのではないかと思います。

泉大津市の現状として、小学校は、地域に満遍なく分布しております。市の特徴としては、市の中心に中学校が2つ並んでいることです。学校間の距離は、近いと言えるほど近くもないという位置関係にあります。

こういった背景の中で、どのような一貫校が考えられるか、大きく言うと、3

つ考えられます。1つは、分離型というもので、空間的に小学校施設と中学校施設が、別々の場所に立地し、それぞれ連携を考えるというものです。2つ目は、一体型です。これは、1つの建物に小学校と中学校が入っており、その建物のなかで、色んな連携活動や一貫活動を行っていくものです。3つ目は、一体型と分離型を組み合わせ、1つの中学校区を考えていくというタイプです。

分離型の中には、3つのタイプ、一体型の中には、4つのタイプがあります。これについて、1つずつ、紹介したいと思います。これからの説明の中に、学校の名前が、実名で出てきますが、理解しやすいように、実名を使っているのであって、必ずしも、名前の出た学校で、その一貫校をするというものではないので、ご理解ください。

まず、分離型の1つのタイプとして、小学校、中学校が今のままの同じ建物を使うものです。小津中校区で言うと、上條と小津、条東と小津で、それぞれ小中一貫を展開し、必要に応じて、小学校同士でも、交流を図っていくものです。東陽、誠風も同じ考え方で、ソフトの仕組みで、繋げていくというものです。このタイプのメリットは、既存の小学校区をそのまま継続でき、学区の再編や、統廃合は一切ないということ、校舎の建替えや改修を待たずに、小中一貫の運営を始められることです。デメリットは、小学生と中学生が、交流をしようと思うと、移動が生じることです。また、色んな研究で明らかになっていますが、分離型の学校での連携は、やや弱い部分があり、一貫教育の成果もやや弱いという研究結果もあります。また、小学校8校、中学校3校が残りますので、公共施設のコンパクト化には、寄与しないというデメリットもあります。これが、ごく一般的な分離型の小中一貫校です。

分離型の2つ目のタイプは、世の中ではあまり見られないです。小津中校区で例えると、今のまま、離れている3つの校舎を、小津中を体育・芸術系学舎、上條を理系学舎、条東を文系学舎とし、3つの校舎を1つの学校とみなし、子どもたちは、3つの校舎を活動に応じて使い分ける。分け方としては、5、6年生を集めて授業をしたり、低学年を集めて授業をしたり、という使い方もできます。デメリット、メリットは、先ほどの分離型とほぼ同じですが、一般的な分離型と比べると、学校間の連携や、交流活動、先生同士の連携と言うのは、促進されるのではないかと思います。その一方で、1人1人の子どもにとって、上條小学校の1年1組が自分の帰属する拠点だというアイデンティティが、やや薄くなるという問題がありそうです。連携で、色んな活動ができるが、調整が難しくなってしまうことも考えられます。学校の個性化というメリットもあります。

分離型の3つ目のタイプです。本市では、こども園、幼稚園と小学校との連携活動が活発に行われているということ踏まえ、0歳から5歳児までの施設と、小学校1年生から4年生までを1つの学校とした幼低校とし、小学校5年生から中学校3年生までを1つの学校とした中高学年校とします。幼低校は、現在の小学校を活用し、中高学年校は現在の中学校を活用し、これを展開します。これにより、中1ギャップ、小1問題を解消することが可能となります。一貫校で、学年のまとまりとして、4・3・2制や、5・2・2制というような、学年のまとまりを考えることが、よくあります。幼低校と中高学年校の組み合わせで、ちょうど、4・3・2制のまとまりができ、学年のまとまり的にも、うまく対応ができます。場合によっては、4・3・2制ではなく、5年生が幼低校に入ってきて、5・2・2制とするパターンも考えられます。

このタイプも、学校区の統廃合、再編がなく、幼小連携の強化、中1ギャップ、小1問題の解消にも繋がっていきます。さらに、幼低校は、子育て支援や、福祉の活動の拠点となりうる可能性があります。デメリットは、もともと1から



6年生であった小学校を分けるので、小学校のまとまりが希薄になるという問題があります。中高学年校には、現在の中1から中3に加えて、3つの小学校の5、6年生が入ってきますと、学校の規模としては、非常に大きくなってしまいう問題です。

次は、一体型と分離型を組み合わせるタイプです。これは、小津校区で例えると、小津中学校と、上條小学校を一体型の一貫校とし、条東は、分離型の一貫校として考えます。分離型と一体型を選べるようにすることもでき、将来的に子どもが減ってきたときに、一体型の学校へ、吸収するということも、考えられます。これのメリットとしては、しっかりとした、一体型の校舎が3つ作れるということ、分離型と一体型の特徴をうまく相対化しながら、お互いにフィードバックする関係を作れるということもあります。そして、学校数を8校にでき、コンパクト化にも寄与します。デメリットは、一体型と分離型との不平等性が生まれること、中学校に進学するときに、分離型と一体型とでは、差が出てくること。小学生に比べて、中学生が圧倒的に多くなることが考えられます。

次は、一体型です。これは純粋に、小学校と中学校が1つの建物の中で一貫教育を展開していくものです。考え方は、今ある8つの小学校に、中学校を分けていく。要するに、上條校区の中学生は、上條の一貫校に、条東校区の中学生は、条東の一貫校に行くのです。そうすると、文科省の標準規模より大きくなっている中学校の規模を小さくできます。一貫校の規模としては適正になるが、中学校だけで見たときには、教員の定数が問題になるかもしれません。部活動においても、人数が少なくなってしまうますが、その際には、元の中学校校区で1つのチームにするなど、再連携を図ることも可能ではないでしょうか。メリットとしては、小学校区はそのまま残り、学校区の統廃合、再編はありません。一貫校に適した規模である学年2、3クラスに全ての学校が転換できます。さらに、小学校と中学校が同じ校区となるので、PTAも全部同じになり、小中での同質性、生活圏が一致することにより、地域での繋がり良さも出てきます。この場合は、学校が8校になりますので、3校、減らすことができます。デメリットとしては、中学校だけで見たときに、規模が小さいこと。小学校を一貫校にすると、敷地が小さい学校があるので、それをどうするかという問題もあります。今の8小学校をすべて、小中一貫校として整備すると、東陽、誠風の広い敷地が空くので、例えば、スポーツ施設やホールなどをつくり、学校で使うという考え方もあります。

次の一体型のタイプは、小学校も、中学校も、校区を再編するという方法です。先ほどのタイプは、小学校区はそのまま残していましたが、これは、小学校区を再編します。統廃合ではなく、校区の再編です。例えば、6つの小学校区をつくります。将来の人口減を見据えると、6つの校区ぐらいの規模が良いのかと思います。線の引き方は、地域のまとまりなどを考えながら、慎重にする必要がありますが、8つの小学校区を6つにすることで、1つ1つの学校の規模を、ある程度確保した、小中一貫校ができます。敷地の広い学校を選んでもできますし、学校もバランスよく配置するということもできます。デメリットは、校区の大きな再編を伴うので、調整が難しいことです。やってみないと分かりませんが、小学校によって、大きく校区が変わる所とあまり変わらないところが出てくることも、考えられます。

次のタイプが、全国的に、小中一貫をする際に一般的に行われているものです。中学校区にある小学校をすべて統廃合し、1つの小学校として、小中一貫校とするタイプです。実際にこの方法をとっているところは、小規模な学校を集めており、大規模な学校を集めると、学校規模が大きくなり過ぎてしまい、一貫教育というより、小学校をどうするか、中学校をどうするかという議論が中心となる危

険性があります。小学校を1つにまとめてしまうので、大きな学区の再編が必要となることもデメリットとしてあります。地域から小学校がなくなってしまうという問題もあります。メリットとしては、一体型の一貫校をつくることができ、学校数を減らすことで、公共施設再編にも寄与します。

最後のタイプとして、同じ一体型でも、規模を小さくしようということで、施設としては、小津の場合は、2小1中でまとまった1つの施設、東陽、誠風は3小1中で1つの施設をつくりませんが、小学校自体を大きくしないということで、それぞれの小学校と中学校で一貫校をして、施設は1つにまとめるという考え方です。これによって、大規模になりがちな学校を、少し規模を小さく抑えられることが、メリットです。デメリットは、そうはいつでも、全体としては大規模な学校になることは違いありません。

泉大津で一貫校を考える上で、こういった方法が可能性としてあります。この可能性の中で、方向性を考えていく視点をここにいくつかあげています。1つは、分離型か、一体型かという話です。一般的には、分離型よりも一体型の方が、明らかに一貫教育の成果は出ます。連携のやりやすさも、一体型の方が高いと言われています。

学校規模については、あまり大きくなりすぎてはならない。1学年に5クラスもあるような学校で、9学年となると、学校として大きすぎて、大変なことになります。小中一貫では、1学年2、3クラスぐらいが良い規模です。

一貫校をつくと、当然のように、今までの単独の小学校、中学校に比べて、校舎面積は増えます。場合によっては、1.7倍ほどになることも考えられます。それほど校舎を建てるのは、広い敷地が必要となるので、敷地の広さと校舎面積の増加を対応させて、考えていく必要があります。

統廃合、校区編成は、地域との合意、手続きの煩雑さがありますし、地域と学校との関係が希薄になるという問題もありますので、地域の合意が取れる方法を選ぶ必要があります。

地域に均等に学校があるということが、コミュニティ・スクールを考えていくうえでも重要となりますので、学校配置のバランスについても、考える必要があります。

公共施設再編の問題に、こういった学校の再構成が寄与するという視点も必要になってくるのではないのでしょうか。

これらの視点から、それぞれのタイプが、満たしているかどうかを、記号化しています。以上が、一貫校についての現段階で検討している内容です。

◎教育部長（丸山理佳）本日は、結論を出す会議ではありませんので、先ほどありました泉大津で大事にしたいことや、ここをもう少し横山先生に聞きたいなど、フリートークをお願いします。

◆教育委員（奥健一郎）横山先生、ありがとうございました。非常に整理され、秩序だったご説明で、内容としては非常に良かったです。この説明を聞いて、もやもやしていたものがすっきりしました。

事務局からの説明の中にあつた課題のハードの方は、目に見える要因が多いです。ソフトの方は、目に見えない要因です。つまり、経営学で言うと、マネジメントとリーダーシップの違いです。

リーダーシップとマネジメントは、巷の本屋さんではごっちゃにして書いていることが多いですが、違うものです。リーダーシップとは、変革・推進のことです。マネジメントは、継続的改善のことです。もっと細かく言うと、マネジメントは、企画、立案から、予算化し、モニタリング後に実行します。リーダーシップは、手法が違い、まず、ビジョンあるいは戦略を描き、それに基づいて、人の



ベクトルをそろえる。そして、人を感化させ、実行にもっていくのです。

日本の例で言うと、戦後の高度経済成長では、最初は、リーダーシップの世界でしたが、調子が出てくるとマネジメント、すなわち継続的改善、パッチワーク的に、つぎはぎでやっていくことで良くなりました。悪いところは直し、良いところは残す、前例主義でうまくいってました。しかし、継続的改善だけでは、いずれは、行き詰ってしまいます。この行き詰ったときに、必要となるのが、リーダーシップです。

話を戻すと、ソフトの課題は、リーダーシップであり、ハードの課題は、マネジメントなのです。なので、ハードの課題は、号令で決めさえすれば、市役所の人は優秀なので、きちんとモニタリングし、実行することができます。しかし、ソフトの課題は、例えば、市長や教育長がいて、中間的に行政の責任者がいて、学校現場の校長先生がいて、この人たち全員が危機感をもって、ベクトルをそろえ、一致団結し、ビジョンを描き、ぐいぐい推進していかないと、解決できないと思います。

このままいくと、ハードの課題は、横山先生の案に基づいて決めさえすれば、進んでいくと思います。問題は、ソフトの課題です。きちんとビジョンを描き、ベクトルを揃えないと、学校の先生は、口には出さないが、また、面倒なことが降ってきた。こんなことをして何になると思いつながら、進んで行くこととなります。そうすると、うまくいかない、ぐちゃぐちゃになってしまう危険性があるのではないかと感じました。

◆教育委員（西尾剛）大きく、分離型と一体型という風に分けられ、確かにそれだと分離型は、ハードを改善しなくてもできますが、効果が今ひとつになる。それだと一体型なのかなと思いますが、どの一体型にするかです。中学校に小学校を取り込むタイプは、規模が大きくなり過ぎてしまうのと、通学距離が長くなってしまふので、低学年の子が通うには大変なので、反対が多く出ると思うので、あまり現実的ではないと思いました。中学校を小学校に入れ込めば、そういったことはないかもしれないが、今度は逆に、クラブ活動が成り立たなくなって、中学校が今まで果たしていた機能が低下してしまうのではないのでしょうか。小学校からすると、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいて、メリットも多い気がしますが、中学校にとっては、人数が減り、先生も減り、競争も少なくなるといったデメリットはありますが、メリットは少ない気がします。

◆教育委員（藤原洋子）それぞれにメリット、デメリットがあり、どれが良いと言うことは非常に難しいです。8小学校に中学校を入れるというものについて、1つ心配なのは、今は、適正規模であるが、将来的に、1学年1クラスとなったときに、9年間、子どもたちの間の力関係が固定されてしまいソフト面で、いじめ、不登校の改善とあるが、中々それが図れないのではないのでしょうか。1度、いじめられ、学校に行きにくくなるとその環境が9年間続いてしまうことが考えられます。

新しいものに変えていくということは、難しく、校区編成なんかは、理解を得るのに時間がかかるでしょう。

◆教育委員（奥健一郎）制度がいいから、オートマテカリーに魔法のように思っていた効果が実現するのではなく、制度によって、そこにいる人間が、これだったら良くてできるという気持ちが出てくるから、実現するのです。

◆教育委員（池島明子）マンモス校が良くないとありましたが、やらないといけない最低限のことは、必ずどの学校にもついてくるので、小規模校になればなるほど、先生1人1人の負担が増えるので、手厚い教育ができるようになって、実は、色んな仕事をしないとけないということに変わりはないので、小さい学校が増

えるというのは、賛成ではないです。

20年後に人口が7割になるのであれば、いまの小学校を減らしていくしかないように思います。

これからは、地域の力が重要になってくると思うので、校区編成をしてしまうと、どこに協力すれば良いかが分からなくなり、協力が得られなくなることが、心配です。母校愛、地元愛を崩さないためにも、大きな再編はしない方が良くと思います。

また、小規模校だと、やさしい子どもは育つと思いますが、そんな子たちも、どこかで、必ず揉まれる時が来ます。中1ギャップがいつ来るかであり、人間としての成熟を求めるのであれば、揉まれるという経験も必要ではないでしょうか。

矛盾が多く、申し訳ありませんが、正直な感想です。

- ◆教育長（富田明徳）いくら条件が整っても、いじめ、不登校の問題は校長先生を中心とするリーダーシップが重要で、良い状況であっても、うまくいかないこともあります。

学校を減らしていくことは、必要かもしれないが、地域性も大事にしていかないといけないので、小学校の統廃合は避けるべきだということは、これまで言い続けてきました。私、個人としては、小学校というのは、その校区で、色んな取組みをしていただいております、その人間関係があると思っているので、小学校の統廃合は避けたい。中学校は、配置が偏っていることもあり、もし、学校数を減らすのであれば、中学校をばらしていく方法が、1番良いのではないかと考えています。

3中学校区、全てを同じパターンでやっていくことには、議論があり、小津校区は、2小1中で、やりやすいのですが、3小となると、感じが変わってきます。小津校区は、早めに方針を決めないといけないですが、東陽、誠風については、お金の面においても、少し先の話になるので、学校運営協議会で、どの形にするかを決めていけるという余地を残していけば、良いと思っています。もちろん、小津校区においても、学校運営協議会で理解を得て、進めていく予定ですが、行政が勝手に決めるのではなく、地域の学校のことを地域で考えてもらい、地域として何を大事にしていくかを決めてもらいたい。

- ◆教育委員（西尾剛）現状を変えるのであれば、よっぽどのメリットがないと、中々賛成は得られない。保護者、地域の人たちが納得できる説明ができないとこちらの思いとは違った理解がされてしまう。

- ◆教育長（富田明徳）1学年1学級になることはどうかと思いますが、20年後のクラス数はどうなっているのでしょうか。

◎教育部長（丸山理佳）シミュレーションでは、条東小学校は、8クラスとなっています。

- ◆教育長（富田明徳）宇多が統廃合した時は、どこまで減ったのですか。

- ◆教育委員（藤原洋子）全学年、1クラスとなりました。

- ◆教育委員（奥健一郎）現場の先生方は、こういったことに危機感はあるのですか。

- ◆教育長（富田明徳）この議論には、まだ入っていないです。今、「なぜいま、教育みらい構想か」を、先生向けに作っているところです。

管理職の先生には、機会があるごとに、話をしているが、一般の先生方は、公共施設適正配置も知らないし、まだ、伝えきれていないです。

- ◆教育委員（奥健一郎）そこはすごく大切ですね。

- ◆教育長（富田明徳）上條小学校を建て直す時に、全体のプランがなければ、上條小学校を15%減らして、建て直してくださいとなってしまいます。すべてを個々に、15%減らしていくとつまらないものができるだけだと思っています。ここ

は膨らみますが、こっちは大幅に減らしますといった全体像があれば、合意を得やすいと考えています。今が、教育施設全体で15%減というプランをたてるタイミングなのです。

- ◆教育委員（奥健一郎）これは、改革ですね。お上が決めて、通達して、1、2回説明会をして、動いてくださいというやり方だと、きつとうまくいかない。
- ◆教育委員（西尾剛）実際にベストな方法は、やってみないと分からない。小中一貫が良いのか、今のままが良いのか、10年、20年経ってみないと分からない。なので、一斉に小中一貫に変えるのは危険な気がします。1つずつ様子を見ながら進めるのはどうでしょうか。
- ◆教育長（富田明德）一貫教育が全国で成果をあげているのは間違いないのです。
- ◆教育委員（西尾剛）失敗している例もあるのではないですか。
- ◆教育長（富田明德）失敗しているところは、名前だけ、一貫と言っているところですよ。
- ◆教育委員（西尾剛）藤原委員がおっしゃったように、1回失敗してしまうと、9年間、挽回不可能なので、今までだと、6年間だったのが、9年間、我慢しないといけなくなってしまいます。
- ◆教育長（富田明德）そうなったときには、また、考えないといけませんが、ただ、いじめをなくす、なくせるのは、学級担任の力です。
- ◆教育委員（西尾剛）いじめだけでなく、クラスの中の序列のようなものが、クラス替えもなかったらずっと続いてしまうのではないのでしょうか。
- ◆教育長（富田明德）クラス替えがないような段階になれば、再度考えないといけなと思っています。その時が来れば、学校の統廃合も、市民の理解が得られるのではないかと考えています。今の段階では、なぜ無くすのかと思われるので、校区の再編は避けながら、学校規模を一定にして、なおかつ、学校数を減らし、実のある、一体型の一貫校をめざしていく。

小津校区では、中学校を小学校の上に乗せる形が良いのではないかと考えているが、そうすると、先生の数がどう維持されるのかななどを、大阪府の教育庁と協議を進めていかないといけない。

- ◆（横山俊祐）実は今、日本で1番多いのは学年1クラスの学校なのです。これが何を意味するかを考えて頂きたい。小さい学校が非常に多いです。
- ◆教育長（富田明德）みらい構想有識者会議では、泉大津市は、恵まれていますよ、と言われました。恵まれている今のうちに、方向性を決めるべきだと思います。
- ◆市長（南出賢一）皆様の意見を聞きながら、考えていましたが、私の中でもまとまっていないです。

今日は、横山先生に案を出していただいたので、この素地を基に、議論はできるのですが、すごく難しいので、スマートに議論してはいけないなと思いました。

奥先生がおっしゃっていた、マネジメントの方の施設整備は、建替えが迫ってきますので、考えていかないといけないですが、市民の理解を得ようとしたら、なぜ、何のためにするのですかということが、しっかり説明できないといけません。いじめ、不登校の解消、学力の向上などは、普遍の問題であり、当たり前と考えるのであれば、奥委員が言っていた危機感がキーワードだと思います。変革期における教育とは、どうあるべきか考えないといけない時代が来ていると思っています。

時代は、訳が分からないぐらいに変わります。まず、お金の概念が完全に変わります。通貨が、物を購入するだけでなく、信用によって、お金のあり方が変わります。AI、IOTも大きく変わってくるので、仕事のあり方も変わると思います。

そう考えたときに、我々が経験してきた時代と、全く違う時代になるということ  
を前提に教育を考えるのであれば、同じような学校を並べるのではなく、学校ご  
とに、何か特色をつけた、メリハリのある教育が良いのではないかとといった議論  
も必要になるのではないのでしょうか。

議論の順番としては、まず、背景認識ですね。おそらくこんな時代になるであ  
ろう、今こんな課題がある。だから、こういったソリューションを提供できる教  
育をやろうとなる。背景認識、将来認識をある程度共有したうえで、どういった  
ことをすべきかと考えたところに大義が出てくるのかと思います。

ベースになる不易の部分と、変革期における教育とはという部分があり、今後、  
市民の理解を得るには、我々は、将来をこのように見えています。だから、こうい  
う教育が必要だと思いますぐらいの大義が必要だとすごく思いました。

◆教育長（富田明徳）我々もまだ、横山先生にいただいたものを消化しきれていな  
い。

今、本当に思っているのは、市長がおっしゃるように、義務教育は一緒だけれ  
ども、地域ごとで、地域性はあるべきだということです。望ましい形は、地域ご  
とに違うのではないのでしょうか。

◆市長（南出賢一）もう少し、議論の軸が必要な気がします。

先ほど、小津校区で人口が減るという話がありましたが、あくまでも、今の流  
れだと、こうなりますという話であり、実際に小津校区を見てみると、助松団地  
があります。助松団地は約60棟あり、約2000人の人が住んでいます。建物  
が築55年ぐらいです。今後このまま、続けますかと考えると、開発用地になる  
可能性も考えられます。そうなると、泉大津に今までなかったぐらいに広大な敷  
地があそこに生まれます。そこに何が来るかは、まったくの白紙ですが、もし、  
住宅になると、人口は減るところか、増えることも考えられます。

◆教育長（富田明徳）私も、義務教育学校を条東と上條につくったら、調整区から、  
流れてくるのではないかと考えています。認定こども園ができたときは、すごく  
人気が出て、膨らんだように、やってみないと分からない部分はあります。

---

## （2）その他

---

◎教育政策課（有澤久喜）事務局より、報告があります。情報提供として、先端教  
育人材育成事業のブレインブースト読書教室の開催状況をお話しさせていただきます。

これは、7月4日に初日を迎えたブレインブースト読書教室の写真です。7月  
から9月までと10月から12月まで、前期後期それぞれ10回ずつ開催します。

参加の子どもたちは、読書手帳を1冊以上達成した5年生以上を対象に、学校  
で募集しましたところ、定員である12名の応募がありました。写真は、ブレ  
インブースト多読精読協会代表理事である長井邦良先生と、前期課程のこどもたち  
です。タブレットを使って、一瞬浮かび上がるバラバラの文字を文章にするトレ  
ーニングや、文章を一定のテンポとのかたまりで読む指さしトレーニングで、無意  
識に早く本が読めるようにトレーニングをしています。

初日は、トレーニングの経験者の子どもたちも参加して、参加者の前で、実際  
に読んで、本の内容を説明しだすと、参加者は、「なんで読めんの～」や、「無理  
や～」など、大変おどろいていました。その反面、トレーニングが始まると、熱  
心に取り組んでいました。

先週の11日に第2回目を開催しましたが、子ども達は、トレーニングにより、

無意識のうちに早く本が読めていることを実感し、終了時には、迎えに来ていた保護者に「こんなに読めるようになったよ」と得意げに話をしていました。

◆教育委員（藤原洋子）参加した子どもたちは何歳ですか。

◎教育政策課（有澤久喜）今回は、小学5年生が5名と、6年生が1名です。

◆教育委員（池島明子）人材育成「事業」ということで、感想だけでなく、データを発表したりするのですか。

◎教育政策課（有澤久喜）毎回、データをとっています。発表するかどうかは、検討中です。

◆市長（南出賢一）少し補足させていただきます。今、理化学研究所と一緒に研究をしたいということで、実現に向けて、座組みを整えだしているところです。ただ、研究予算というハードルがありますので、そこをどうするかというスキームは、今後、協議になると思います。

速読をするために、速読をしているのではなくて、右脳を鍛えることで、自然と認識領域が広がり、速読ができるようになっているのです。

これからの時代、左脳での論理的思考も大切ですが、AIにとって代わられると考えると、右脳の感性や、直観力、想像力、創発力など、人間にしかできない部分の教育は、より注目が必要となっていくと思います。

※協議事項終結

午後5時30分終了